

事かしくして後世をいふかめ萬代に設くんと年来小  
 巧なる並しもの曲折の末朽跡り多々木花洛綿珠乃  
 櫻の櫻浪華のりるるにわろく一飛弾更甚五席  
 他よりふるる彫物とどく腰掛と他より自下土と運ひ  
 子弁女とわく一年未指か延客をうるとのふく傳りそ  
 數十日とゆる其亭のれり於洛來のいふ本朝の儀  
 曲折とさくしと陸後とつとゆきとこまを陸後亭と名  
 つありし小老とさるの亭の合隈かきせし樂一と  
 君の意ふれ有りとと一寸の虫中も五つの魂文王乃方  
 百里の園とらぬれを吊り室の方千里中もいふと

是かんはる事浅知る金言の書ありんて文政つちのよ  
 子記と  
 九く秋兼應

文政十一年四月廿八日抄届

講に作習る家来  
 糸幸太席 子十八歳  
 岡盛太席 子十五歳  
 坂倉苗太席 子十四歳

右葉右席盛太席親之丞添之丞坊後文化十四世年十有申



於其所傳軍亂津休右邊及殺害其傷と述去月迄今  
其外者亦尋一有海共行東相知市山有明宣年二月  
四帳河沙扁一達也然其相其相右足才之者有知女といふ  
追々年以山も相成り有述公の勿論御府内並河山也也相尋  
也由以才親之敵討取一度所相願出右留次所  
次所公言所才身足之敵討取交付右足才之者とも  
幼年之砂石敵休右邊西神も見えぬ中山身足才之者小  
所跡居出度之旨是亦然告有石右也休右邊討取  
其所之役人相届可中中身之依之帳之口記置公  
は於以使者口相一達は以上

四月廿八日

講和伯耆守家来

河村助左衛門

細川幽齋詠歌

秀吉公元旦の四夜小つよの夏と四有よて四重事の好は  
幽歌公御前一同と一々心一々四重と流りく四者よとの夏  
とわつりく目出度たうと一首と四意有るれを取ら

春代いも代いも代いもき石の岩おと成て若おむす可免

道通院殿正月十日河内小法會奉りり茶の口より明宣期也